

Point

清潔かつ適切な種子予措を行い、 健苗の育成に繋げましょう！



稲作



男鹿地区営農センター 加藤 勇輝

清潔な資材・作業所で適切な種子予措をしましょう

種子予措の作業場所や容器、循環式催芽機などを、使用前後にしっかり清掃してください。「ばか苗病」が昨年に発生していた場合、病原菌が付着していたり、籾殻などが伝染源になったりする可能性があります。今年の作業を始める前に作業場所の衛生管理を見直したうえで、種子管理を適切に行い、健苗を育成できるようにしましょう。

種子・苗箱消毒

無消毒種子を使用する場合は塩水選、種子消毒を行います。昨年に「ばか苗病」や「もみ枯細菌病」が発生した場合は、必ず苗箱を消毒しましょう。

種子消毒	ヘルシード乳剤	ばか苗病・ごま葉枯病・いもち病	200倍 24時間種子浸種
	スターナ水和剤	苗立枯病・もみ枯細菌病	200倍 24時間種子浸種
	テクリードCフロアブル	ばか苗病・ごま葉枯病・いもち病・ 苗立枯病・もみ枯細菌病	200倍 24時間種子浸種
苗箱消毒	イチバン	多くの菌に効果(特にリゾープス属菌)	500~1,000倍 瞬時浸漬または散布

種子管理の注意点

● 保管時

湿気や水分の影響を受けない状態を保ちます。

● 浸種

品種や消毒方法が異なる種子は、必ず別々の容器で浸種や催芽をします。

水の量 種子1kgにつき水3.5ℓが適量です。

適水温 浸種を始めるときは、お湯を使って15℃の水を作るように調整します。
浸種中は適水温の10~15℃を維持し、維持し、10℃より低くならないように注意してください。水温が低いと消毒剤の効果が劣るうえ、種子の休眠が深まって発芽のばらつきが大きくなるため、適水温を確保するように気を付けましょう。
※浸種する容器に必ずふたをして保温し、容器に病原菌が入らないようにしましょう。

水交換 **浸種開始から48時間は、水を交換しないでください。**消毒効果を高めるため、交換は**2~3日ごとに期間中2~3回程度**にします。

期間 **積算温度100℃**(水温15℃の場合1週間程度)をめどにしましょう。**籾殻を透かして胚が白く見えるようになったときが、浸種終了の目安です。**

● 催芽

内部まで温度を均一にするため、催芽前に**36~40℃**程度のお湯に湯通ししてください。品種によって催芽時間が異なるため、他の品種と同時に処理しないようにしましょう。

催芽適温 **30~32℃**で行いましょう。高すぎたり低すぎたりすると、病気の発生を助長します。催芽中は水分を切らさないように気を付けてください。

催芽時間 **約19~25時間**を目安に、芽の長さは**ハト胸程度(催芽長1mm)**としてください。同じ品種でも年によって休眠性に差があり、作業時期によっては発芽速度が異なることがあります。芽の程度を自分の目で十分に、ムラがないように種子袋の中まで必ず確認しましょう。